

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

1日

赤口 畢

旧5月26日

月曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

しゆ

もう

やく

そく

衆望亦足

「身内の授記に皆が満足する」

お釈迦さまが阿難と羅睺羅に授記を与えたなら、弟子たちは皆満足できると請う場面です。

お釈迦さまにとって阿難は従弟、羅睺羅は息子、どちらも親族にあたります。

他者に教えるよりも、より身近な人間に教える方が難しいものです。

お釈迦さまが親族に授記を与えたということは、縁が遠い者たちにも授記を得る機会があるのだと確信し、満足したということです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

2日

先勝 背

旧5月27日

火曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

じょう りゆう しょう ばん
常立勝幡

「勝れた教えが弘まる浄土」

バラモン教が盛んであった頃、学派ごとに法論があり、その問答に勝った際にその家の門戸に旗を立てるという習慣がありました。

この旗を「勝幡」といい、「常立勝幡」とは常に旗が立っている状態、つまり一番勝れた教えが弘まり、人々が教化されている国であるということを表しています。

阿難の仏国土は、勝れた教えによって人々の心は浄められた浄土であるということです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

友引 参

旧5月28日

3日

水曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

しよぶつによらい しよぐさんだん

諸仏如来 所共讚嘆

「諸仏如来に讚嘆される」

阿難は仏と成った時、諸仏如来は讚嘆します。

阿難が諸仏に讚嘆されるようになれば、その仏

国土の住人達も阿難を讚嘆します。

仏の慈悲や救護が何であるかわからない凡夫

は、仏を讚嘆することはできません。

仏を讚嘆するということは、仏の慈悲と救護が

人々に伝わったということを意味します。

仏さまが有難いと思えるのは、信仰の第一歩で

もあるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

4日

先負 井

旧5月29日

木曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

しん

ぼつ

ち

ぼ

さつ

新発意菩薩

「下位の菩薩たちの疑問」

「新発意菩薩」とは、新たに菩薩の行を修行しようとして決意したばかりの下位の菩薩。

上位の大菩薩たちが授記を得たと聞いたことがないのに、菩薩よりさらに下位の声聞である阿難に授記が与えられるのはなぜかと、新発意菩薩たちは疑問を抱きます。

お釈迦さまは、現世だけではなく、阿難の前世から永い修行の結果が今ここで熟したのだと告げられます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

5日

仏滅 鬼

旧5月30日

金曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

あ なん じょう ぎょう た もん

阿難常楽多聞

「阿難は常に多聞を楽（ねが）う」

阿難は過去世において、多くの仏さまの教えを聞き覚えて、智慧を得ようと努めました。

そして、その教えを実行しようと精進してきた結果、現世においてお釈迦さまの弟子となり、授記を与えられることになったのです。

ただ聞くだけではなく、自分のものとなるように考え、実践することを繰り返し、不断の努力をすることによって仏に成る約束を得ることができたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

6日

小暑

赤口 鬼

旧6月1日

土曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

やく しき ほん がん

亦識本願

「仏の本願を知ることができた」

お釈迦さまから、仏に成ったその仏国土の様子を告げられた阿難は、今まで聞いてきた教えの全てが理解することができました。

そして、前世から仏さまの教えを聞いてきて、それを広く伝えるために現世に生まれ、未来に仏と成ると気づいたのです。

そして、過去・現在・未来の三世の諸仏の教えは皆同じ、一仏乗を説くことが本願であると気づいたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

7日

七夕

先勝 柳

旧6月2日

日曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

ほう べん い じ しや
方便為侍者

「阿難は方便をもって侍者となる」

阿難は授記を得て、これからもお釈迦さまのお側に仕えて、教えを将来世に残るように守り伝えるはたらきをすると誓いました。

それぞれの立場や境遇によって、教えを伝える方法手段は変わってきます。

それを「方便」というのです。

阿難は、お釈迦さまの侍者としてお側に仕え、教えを記憶し後世に伝えることがその役割だと気づき、実践しようと決めたのです。

妙法蓮華經授學無學人記品第九

當供養。六十二億諸仏。護持法蔵。然後得阿耨多羅三藐三菩提。教化二十千萬億恒河沙。諸菩薩等。令成阿耨多羅三藐三菩提。国名常立勝旛。其土清淨。瑠璃為地。劫名妙音氣滿。其仏壽命。無量千萬億。阿僧祇劫。若人於千萬億。無量阿僧祇劫中。算數校計。不能得知。正法住世。倍於壽命。像法住世。復倍正法。阿難。是山海慧自在通王仏。為十方。無量千萬億。恒河沙等。諸仏如來。所共讚歎。稱其功德。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〔略〕

爾時會中。新發意菩薩八千人。咸作是念。我等尚不聞。諸大菩薩。得如是記。有何因縁。而諸声聞。得如是決。爾時世尊。知諸菩薩。心之所念。而告之曰。諸善男子。我与阿難等。於空王仏所。同時發阿耨多羅三藐三菩提心。阿難。常樂多聞。我常勤精進。是故我已得成阿耨多羅三藐三菩提。而阿難。護持我法。亦護將來。諸仏法蔵。教化成就。諸菩薩衆。其本願如是。故獲斯記。阿難面於仏前。自聞授記。及国土莊嚴。所願具足。心大歡喜。得未曾有。即時憶念。過去無量千萬億。諸仏法蔵。通達無礙。如今所聞。亦識本願。爾時阿難。而説偈言

世尊甚希有 令我念過去 無種諸仏法 如今日所聞 我今無復疑 安住於仏道 方便為侍者

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

8日

友引 星

旧6月3日

月曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

而作長子

に さ ちようじ

猶如今也

ゆい によ こん や

「仏の子として生まれる縁」

羅睺羅はお釈迦さまの息子として現世に生まれた縁で、お釈迦さまの弟子となり仏に成ると授記を得ました。

この先も同じ縁を繰り返し、多くの仏の子として生まれ、その親に仕えることで功徳を積み、やがて仏に成れるというのです。

人にはいろいろ縁がありますが、羅睺羅の縁は仏の子として生まれること。

それはそれで厳しい修行を伴うものです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

9日

先負 張

旧6月4日

火曜

妙法蓮華経授学無学人記品第九

羅^ら 眈^ご 羅^ら 密^{みつ} 行^{ぎょう}

「羅眈羅の密行はお釈迦さまのみが知る」

「密行」とは、心に思うことを表に現わさず、わかっていてもそれを見せずに人を導きます。

羅眈羅は、お釈迦さまの息子としての立場を主張もせず、黙々と自分の修行を積みました。

賢い智慧を心に備えていても、それを表に出さずにしたので、周囲の人々も羅眈羅の密行を意識することはなかったのです。

お釈迦さまは、その羅眈羅の密行を自分だけが知っているといわれ、授記を与えたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

10日

仏滅 翼

旧6月5日

水曜

妙法蓮華経授学無学記品第九

ごい にゆうなん

じゃくねん しょうじょう

其意柔軟

寂然清浄

「柔軟に寂然清浄に一心に仏を觀たてまつる」

「柔軟」とは、人と争わず、代償を求めず、尊大にならずにいられる柔らかさ。

「寂然」とは、周囲から影響を受けてても、悩んだり、怒ったりしないこと。

「清浄」とは、心に穢れや罪のあともなく、汚れていないこと。

二千人の修行者たちが、それらの心持ちで一心に仏に成りたいとの願いを持っているのを知ったお釈迦さまは授記を与えました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

11

日 木曜

大安 軫

旧6月6日

妙法蓮華経記学無学人品第九

がくむ がくに せん にん じゆき

学無学二千人の授記

「仏に成るといふ思いで不断の努力を」

お釈迦さまは、二千人の学無学の修行者たちに、柔軟・寂然・清浄の心持ちで、菩薩の道を歩み続けていけば必ず仏に成れると授記を与えられました。

お釈迦さまは授記を与える際には、今の思いを持ち続け、不断の努力をするという条件を提示します。

人の心はとかく緩みやすいものです。

仏の道を見失わぬよう歩むことが肝要です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

12日

赤口 角

旧6月7日

金曜

妙法蓮華経法師品第十

因薬王菩薩 告八万大士

いん やく おう ぼ さつ ごう はち まん だい し

「薬王菩薩に因(よ)せて、八万大士に告げる」

お釈迦さまが『法師品』の説法するにあたり、語りかける対象として薬王菩薩を選ばれました。

それが「因せる」ということです。

薬王菩薩が受け答えをする背後には、八万人の大士（仏に成ろうという志を持つ菩薩たち）があり、彼らにもお釈迦さまは語りかけているわけです。

一人に語りながら皆に告げているのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

13日

先勝 亢

旧6月8日

土曜

妙法蓮華経法師品第十

いち ねん ずい き

一念随喜

「ほんの一瞬でも随喜するものに授記を与える」

法華経の一偈一句を聞くだけで、ほんの一瞬でも心の底から悦びを感じられるなら、その者に授記を与えると、お釈迦さまは告げました。

ほんの一瞬でも人々を救おうと慈悲の心が生じたならば、そして自分も仏になれるのだと決意を固め歩み出したなら、その者は仏に成ることが約束されているというのです。

その可能性が私たちも含めて、誰にでもあると、お釈迦さまは繰り返し説かれました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

14日

友引 氏

旧6月9日

日曜

妙法蓮華経法師品第十

ご しゅ ほつ し

五種法師

「法華経修行の五種」

「五種法師」とは、法華経修行の五種。

① 受持；教えを信じ、持ち続け実践すること。

「受持」は修行の中心「正行」です。

② 読；経文を文字の通り読むこと

③ 誦；経文を暗誦し、繰り返し考えること

④ 解説；経を解釈して他者に説くこと

⑤ 書写；経を写し伝えていくこと

「読・誦・解説・書写」は、「受持」を堅固な

ものにするための「助行」となるものです。

妙法蓮華經法師品第十

爾時世尊。因藥王菩薩。告八万大士。藥王。汝見是大衆中。無量諸天。龍王。夜又。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人与非人。及比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。求声聞者。求辟支仏者。求仏道者。如是等類。咸於仏前。聞妙法華經。一偈一句。乃至一念隨喜者。我皆与授記。当得阿耨多羅三藐三菩提。仏告藥王。又如來滅度之後。若有人。聞妙法華經。乃至。一偈一句。一念隨喜者。我亦与授。阿耨多羅三藐三菩提記。若復有人。受持。誦誦。解説。書写。妙法華經。乃至一偈。於此經卷。敬視如仏。種種供養。華香瓔珞。抹香。塗香。燒香。汽蓋。幢幡。衣服。伎楽。乃至合掌恭敬。藥王。当知是諸人等。已曾供養。十亿万仏。於諸仏所。成就大願。愍衆生故。生此人間。藥王若有人問。何等衆生。於未來世。当得作仏。応示是諸人等。於未來世。必得作仏。何以故。若善男子。善女人。於法華經。乃至一句。受持。誦誦。解説。書写。種種供養經卷。華香瓔珞。抹香。塗香。燒香。汽蓋。幢幡。衣服。伎楽。合掌恭敬。是人一切世間。所

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

15日

先負 房

旧6月10日

月曜

妙法蓮華経法師品第十

じつ しゆ く よう

十種供養

「十種類の品物や形式の供養」

十種類の品物や形式（華・瓔珞・抹香・塗香・
焼香・幡蓋・衣服・伎楽・合掌）を仏さまにお
供えすることを「十種供養」といいます。

華を供え、香を焚き、瓔珞・幡蓋・衣服などで
莊嚴し、音楽を奏で、合掌して仏さまを恭しく
拜む形を整えるということです。

形式を整えることによって、仏さまを敬う心
と、ありがたい教えを受け止める心構えも整っ
てくるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

16日

仏滅 心

旧6月11日

火曜

妙法蓮華経法師品第十

所しよ忘おう瞻せん奉ぶ忘おう以い如に来ら供く養よう

「法師は如来と同じように供養される」

仏さまの教えは難信難解、凡夫がちよつと見た
だけでは深い意味を理解できません。

そこでその教えをよく学び、世に弘める「法師」
の役割が重要になるのです。

この法師に対して、仏さまに供養するのと同じ
心持ちで供養しなければならぬと、お釈迦さ
まはお説きになりました。

法師と呼ばれる者に、仏と同じ供養を受ける覚
悟があるのかと突きつけられているのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

17

日

大安 尾

旧6月12日

水曜

妙法蓮華経法師品第十

がん しょう し けん

願生此間

「願って末法に生まれ法華経を説く」

末法に生まれ、日蓮聖人のように法華経を弘める人は迫害に遭うといわれています。

そのような人は、前世にて既に仏の智慧を得て、末法の人々を哀れみ、法華経を弘めるために、望んでこの末法の世に生まれ来たのです。

迫害に負けず法華経を説くとは。まさに身をもつて説く「色説」をしている法師です。

その法師を供養する人の功德もまた量り知れないものなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

18日

赤口 箕

旧6月13日

木曜

妙法蓮華経法師品第十

によらいし

如来使

「如来に遣わされた者」

お釈迦さま滅後の迷いの多い時代に、人を救うために、法華経の一句だけでも説くならば、その者は仏さまに遣わされた「使い」であり、仏さまの仕事を代理に行う者だということです。誰か一人のために一句を説いたとしても、それが二人三人と広まっていけば、その功德は広大となるのです。ただし、その影響力が広大になれば、迫害もまた大きくなるので、相当な覚悟が必要です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

19日

先勝 斗

旧6月14日

金曜

妙法蓮華経法師品第十

じょう き め ぶつ

常毀罵仏

ご ざい じょうけい

其罪尚輕

「法華経の行者を毀る罪は仏を罵る罪より重い」

末法の世で法華経を弘める人を毀(そし)る罪は、仏を直接罵(ののし)る罪より重いというのです。

末法には夜が乱れて、仏さまの教えが伝わらなくなる、人の心は益々荒んでいきます。

その荒れた世において人々を救おうと教えを弘めようとする者は尊い者なので、邪魔をしないようにと、お釈迦さまが述べられたのです。

法華経を伝える行者を慈しむお釈迦さまのお心が表された部分です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

20日

友引 女

旧6月15日

土曜

妙法蓮華経法師品第十

ごうどくじゅ

ほつけ

きようしゃ

其有読誦 法華経者

「法華経を読誦する者は供養される」

法華経を読誦する者がいれば、最上の供養をなすべきであると、お釈迦さまは説かれました。ただ口先で法華経を読むだけでなく、迫害を受けても法華経の信仰を変えず、法華経に説かれているところを実践するということです。それが身をもって法華経を読む「色読」です。数々の大難に遭っても、信仰を変えることなく法華経を弘め続けた日蓮聖人は、まさに法華経を色読された「如来使」なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

21日

先負 虚

旧6月16日

日曜

妙法蓮華経法師品第十

た ん み じ き よ う し や ご ふ く ぶ か ひ

歎美持経者 其福復過彼

「法華経を受持する者を讃える功德は大きい」

仏道を求めて長い年月、仏さまをたたえる功德より、末法に法華経を弘める人をたたえる功德の方がより大きいとお釈迦さまは説かれます。末法における法華経弘通はそれほど大変なことなのです。

日蓮聖人は「極楽百年の修行は穢土一日の功に及ばず」と『報恩抄』に説かれました。

穢土で迫害を受けて一日でも教えを弘める功德は、極楽百年の修行より尊いというのです。

妙法蓮華經法師品第十

於法華經。乃至一句。受持。誦誦。解說。書寫。種種供養經卷。華香瓔珞。抹香。塗香。燒香。汽蓋。幢旛。衣服。伎樂。合掌恭敬。是人一切世間。所忘瞻奉。忘以如來供養。而供養之。當知此人。是大菩薩。成就阿耨多羅三藐三菩提。哀愍衆生。願生此間。廣演分別。妙法華經。何況盡能受持。種種供養者。藥王。當知是人。自捨清淨業報。於我滅度後。愍衆生故。生於惡世。廣演此經。若是善男子。善女人。我滅度後能竊為一人。說法華經。乃至一句。當知是人。則如來使。如來所遣。行如來事。何況於大衆中。廣為人說。藥王。若有惡人。以不善心。於一劫中。現於仏前。常毀罵仏。其罪尚輕。若人以一惡言。毀悅在家出家。誦誦。法華經者。其罪甚重。藥王。其有誦誦。法華經者。當知是人。以仏莊嚴。

〈略〉

有人求仏道 而於一劫中 合掌在我前 以無數偈讚 由是讚仏故 得無量功德
歎美持經者 其福復過彼 於八十億劫 以最妙色声 及与香味触 供養持經者

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

22日

仏滅 危

旧6月17日

月曜

妙法蓮華経法師品第十

法華最第一

ほっ け さい だい いち

「お釈迦さまが心のままに説かれた尊い教え」

お釈迦さまは、ご自身が説いた教えはたくさんあるが、その中でもこの法華経が最第一であると述べられました。

お釈迦さまが心の思うままに説かれた尊い教え故に、それも末法に弘める人の功德は大きく、最もたたえなければならぬと説かれました。

それほど功德があるということは、責任も重く迫害も多いので、相当の覚悟が必要であることとの裏付けでもあります。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

23日

大安 室

旧6月18日

火曜

妙法蓮華経法師品第十

已い説せつ 今こん説せつ 当とう説せつ

「已い(すでに)に説せつき、今こん説せつき、当とう(まさに)に説せつかん」

「已説」とは、お釈迦さまが悟りを得てから四十余年間に、已に説いた華嚴経や般若経など。

「今説」とは、今説かれている法華経。

「当説」とは、法華経の後に当に説く涅槃経。

「已説 今説 当説」を比べ合わせ見て、今説いている法華経は心のままに説いているので最も難信難解であるとお釈迦さまは説かれています。

法華経が難信難解なのは、凡夫も仏に成れると
いうことを信じ切れるか否かという点です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

24日

赤口 壁

旧6月19日

水曜

妙法蓮華経法師品第十

ゆう た おん しつ

きょう めつ ど ご

猶多怨嫉

況滅度後

「如来在世にも怨嫉多し、況や滅後の後をや」

お釈迦さまが在世のときでさえ、自分は悟っているつもりで、それ以上を望まず、お釈迦さまが本心を説いた真実の教えを聞こうともしない者がいました。

まして、お釈迦さまが入滅した後の末法の時代には、正しい教えを受け入れず、恨みや妬みを抱き、迫害しようとする者が出てきます。

それを覚悟しなければ、正しい教えが広まらないということなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

25日

先勝 奎

旧6月20日

木曜

妙法蓮華経法師品第十

によらいそくい いえふし

如来則為 以衣覆之

「如来の衣をもって法師を覆う」

お釈迦さまの滅後に法華経をよく受持し、人に説くならばその功德は大きく、お釈迦さまはその衣によって、その人を覆うように守護してくださると説かれています。

どんなに苦しい状況にあっても、退転することなく、最後まで信心を貫く覚悟をもって進めば、お釈迦さまだけでなく、多くの仏さまの守護が表れるというのです。やり切ることによって守護が表れるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

26日

友引 婁

旧6月22日

金曜

妙法蓮華経法師品第十

皆かい応おう起き七しつ宝ぼう塔とう

「皆七宝で飾られた塔を建ててるべし」

法華経を説き、読み、誦し、書写し、経巻を置き帰依する人が集まる場所に塔を建てようにと、お釈迦さまは説かれました。

塔を建て、皆が仰ぎ見て、仏さまの徳を讃え、教えを弘める拠点にせよということなのです。

法華経を弘める拠点が各地につくられて、すべての人々に伝わり、皆が幸せになることが何よりも大切なのです。

仏塔はそのシンボルです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

27

日

先負 胃

旧6月23日

土曜

妙法蓮華経法師品第十

ふ しゅ ぶ あん しや り

不須復安舍利

「仏塔だからといって舍利を納める必要はない」

法華経が広まる場所があるならば、それで満足しているのです、塔を建ててもそこに舍利を祀る必要はないとお釈迦さまは述べられました。

なぜなら、説き遺した教えの中に仏の全身が具わっているのだから、その教えを信じ、学び、実践していけば、仏と共に居るのと同じことなので、仏舍利を供養するために塔を建てる必要はないということです。教えを弘めることこそが大事だということです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

28日

仏滅 昴

旧6月23日

日曜

妙法蓮華経法師品第十

ざいけ しゅつけ

在家出家

ぎょう ぼ さつ どう

行菩薩道

「在家出家、法華経を受持して菩薩道を行じる」

在家出家いずれも、菩薩道を行じる者がいたとしても、その者が法華経を見たり聞いたり、読誦も供養もしたことがないのなら、それは真の菩薩道を行じたとは言えないのです。

法華経はどこを見ても、凡夫が仏に成れるということが書いてあります。

在家出家に関係なく、自らが仏に成れると信じ、その教えを受持し、実践してこそ、真の菩薩道になるのです。

妙法蓮華經法師品第十

於王今告汝 我所說諸經 而於此經中 法華最第一

爾時仏復告。藥王菩薩摩訶薩。我所說經典。無量千萬億。已說。今說。當說。

〈略〉

猶多怨嫉。況滅度後。藥王當知。〈略〉如來則為。以衣覆之。又為佗方。

〈略〉

若經卷所住之處。皆応起七宝塔。極令高広嚴飾。不須復安舎利。所以者何。

〈略〉

藥王。多有人。在家出家。行菩薩道。若不能得見聞誦誦。書持供養。

〈略〉

譬如有人。渴乏須水。於彼高原。穿鑿求之。猶見乾土。知水尚遠。施功不已。

〈略〉

是善男子。善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃応為四衆。広說斯經。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

29日

大安 畢

旧6月24日

月曜

妙法蓮華経法師品第十

こう

げん

じやく

すい

たと

高原鑿水の喩え

「水近きにありと知る」

喉が渴いて水を求める人が、高原に鑿（のみ）を使って穴を掘っても容易に水は出ません。乾いた土しか出ないとしても、諦めることなく掘り続けると湿った土が出て、さらに掘り進むと泥が出て水が近いことを知るのである。菩薩の道である泥土までいけば、必ず最後は仏になれると信じていることが大事です。少しばかり信心して効果がないとやめてしまえば、仏の道は得られないのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

30日

赤口 鶯

旧6月25日

火曜

妙法蓮華経法師品第十

かい ほう べん もん

開方便門

じ しん じつ そう

示真實相

「方便の門を開き、真實の相を示す」

仏さまの智慧は法華経の中にすべて示されているのだから、方便の門から入り、真實の相。仏の悟りを得られるのだと説かれています。

門を開ければ、中の庭や家の様子が見えるように、さまざまに方便を学ぶと、仏さまの智慧や悟りが見えてくるのです。

法華経を一心に繰り返し読み、ほんとうに味わっていけば、一步一步、仏に近づいていくことができます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

7月

31日

先勝 参

旧6月26日

水曜

妙法蓮華経法師品第十

ぐ きよう

さん き

弘教の三軌

「弘教の三つの心構え」

大難に立ち向い、大きな使命を果たすために、
法華経を弘める三つの心構えが示されました。

①如来の室；仏さまが住む部屋に入った心持ち
一切衆生への大慈悲心

②如来の衣；仏さまの衣を着ている心持ち
困難を耐え忍び柔和忍辱の心

③如来の座；仏さまの椅子に座る心持ち
差別を離れたとらわれない心

この三つの心を持ち続け弘教に励むのです。

妙法蓮華經法師品第十

於王今告汝 我所說諸經 而於此經中 法華最第一

爾時仏復告。藥王菩薩摩訶薩。我所說經典。無量千萬億。已說。今說。當說。

〈略〉

猶多怨嫉。況滅度後。藥王當知。〈略〉如來則為。以衣覆之。又為佗方。

〈略〉

若經卷所住之處。皆応起七宝塔。極令高広嚴飾。不須復安舎利。所以者何。

〈略〉

藥王。多有人。在家出家。行菩薩道。若不能得見聞誦誦。書持供養。

〈略〉

譬如有人。渴乏須水。於彼高原。穿鑿求之。猶見乾土。知水尚遠。施功不已。

〈略〉

是善男子。善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃応為四衆。広說斯經。